

漢文〈五〉

# 漢文を読む

論語

今回の学習のポイント

- ① 「論語」とは
- ② 「論語」を読む

## 『論語』とは

『論語』とは、春秋時代（紀元前七七〇〜紀元前四〇三）の思想家「孔子」の言行録です。言行録とは、言葉や行動を書き記したものです。『論語』は孔子ではなく、その弟子たちによってまとめられました。

番組で金田一先生が「孔子は、先生の先生なんです。」と解説されますが、孔子の「子」は当時の中国の男性の尊称で、『論語』では「先生」の意味を表します。孔子は「儒学」の祖です。「儒学」は日本で徳川時代に幕府の学問として重んじられました。『論語』は、古くから中国のみならず朝鮮やベトナム、ヨーロッパなど世界各国で広く読まれ、今でも多くの人に愛好されています。人間の生き方や知恵など考えるヒントや心に響く言葉が詰まっており、二千五百年以上もの時代を超えて広く読み継がれてきた書物です。

## 『論語』を読む

左は、番組で紹介する『論語』の章句です。『論語』は、「学而第一」から「堯曰第二十」までの二十編から成立します。

子曰、「知之者、不如好之者。好之者、不如乐之者。」  
(雍也第六)

〈書き下し文〉

子曰はく、「之を知る者は、之を好む者にかかず。之を好む者は、之を樂しむ者に如かず。」と。

〈訳〉

孔子が言うことには、「物事を知ることだけでは、これを愛好することに及ばない。愛好することは、これを楽しむことに及ばない。」と。

知るとは、客観的に理解すること。愛好することは、特別な感情を抱くこと。楽しむとは、おもしろくて心が満たされること。楽しむことは、最上なことなのです。

厩焚。子退朝。曰、「傷人乎。」不問馬。

(郷党第十)

〈書き下し文〉

厩焚けたり。子朝より退きて。日はく、「人を傷なへるか」と。馬を問はず。

〈訳〉

孔子の家の馬小屋が火事で焼けた。朝廷を退出して家へ帰った孔子は、「みなに怪我はなかったか。」と尋ねた。馬のことは尋ねなかった。

孔子は馬を決して軽く扱っていたわけではありません。身分にかかわらず人の命を尊ぶ自然な情愛に、改めて大切なこととは何か、ということを教えられる章句です。

子曰、「過而不改，是謂過矣。」

(衛霊公第十五)

〈書き下し文〉

子曰はく、「過ちて改めざる、是を過と謂ふ。」と。

〈現代語訳〉

孔子が言うことには、「間違つてその間違いを改めないのが、本当の過ちというものだ。」と。

ここで大切なことは、ただ反省して謝ることではないようです。同じ過ちを繰り返さないという行動にこそ、深い反省が現れます。行動を重んじる孔子の姿勢が見られます。

子曰、「巧言令色，鮮矣仁。」 (学而第二)

〈書き下し文〉

子曰はく、「巧言令色、鮮なし仁。」と。

〈現代語訳〉

孔子が言うことには、「口先がうまくて、愛想の良い人には、真心は少ないものだなあ。」と。

「仁」とは、自然の情愛に基づく真心のことです。表面的でそのない処世術ではなく、実直さや真心こそ、着実に自分の内に養いたいものです。じっくりと眺めていないと見えないものこそが本物なのかもしれません。

孟武伯問孝。子曰、「父母唯其疾之憂。」  
(為政第二)

〈書き下し文〉

孟武伯孝を問ふ。子曰はく、「父母は唯だ其の疾を之憂ふ。」と。

〈現代語訳〉

孟武伯が孝とはどうすることかと質問した。孔子が言うことには、「父母は、ただもう子どもの病気のことだけを心配している。子どもは身体を大切に健康でいることが、何よりの孝行である。」と。

親孝行については、大きく三つの解釈があります。病気以外のことで両親に心配を掛けないようにすること、常に子どもを健康を心配するような両親の深い愛情に報いて身を慎むこと、老い先短い両親の健康こそ第一に考える必要があるということです。

子曰、「譬如爲山。未成一簣、止吾止也。譬如平地。雖覆一簣、進吾往也。」  
(子罕第九)

〈書き下し文〉

子曰はく、「譬へば山を爲るが如し。未だ一簣を成さざるも、止むは吾が止むなり。譬へば地を平らかにするが如し。一簣を覆すと雖も、進むは吾が往くなり。」と。

〈現代語訳〉

孔子が言うことには、「学問の修養は、例えば山を築くようなものだ。もう一担ぎの土でできあがるというのに完成しないのも、自分が止めるのであって、山は絶対にできない。例えば、土地をならす場合に、一担ぎの土を地上にあけただけでも平らになっていくのは、自分が越くからである。」と。

「千里の道も一歩から」「点滴石をうがつ」という言葉があります。小さなことでも積み重ねれば、いつか成功するという意味です。大きな山も、ひどく凹凸のある地面も、一担ぎ一担ぎ土を運べばいつか形になります。自分を信じて諦めないことが大切だと励まされるような章句です。

## まとめ

子曰はく、「吾十有五にして学に志し、三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に従ひて、矩を踰えず。」と。

これは、孔子の生涯を表した章句だと言われています。「若いころに身に付けた学問に基づいて三十歳で自立し、四十歳でさまざまな事象に動じなくなりました。五十歳で自分の使命を自覚し、六十歳になってどんな話も公平に聞けるようになった。そして、七十歳。自然に感じたことや考えたことに基づいて、ありのままに行動しても、人の道を外すことがなくなった。」という内容です。門弟およそ三千人と言われる孔子。みなさんは、この言葉を読んでどのように感じるでしょうか。

さて、番組で、カレンさんが「知らなすぎた。知るとおもしろい。」とにっこり笑って言っていました。食わず嫌いはもったいない。漢文でも何でも、難しそうだと言えずに、ぜひ手に取って読んでほしいと思います。これまでわからなかったこともきちんと学び直してみると、実はおもしろかったり、もっと知りたくなったりするものがあります。これが、学問や自分自身との新たな出会いであり、リスタートにつながるものです。「わからない」「嫌だ」という思い込みを外して、まず本を開くことから始めましょう。